

色あせない記憶

戦争体験手記

終戦の日の私

「戦争が済んだ。戦争は終わった。」
井戸の前に立ちながら、呪文の如く繰り返していた。
戦争終結への思いは複雑な思いであった。
ひんやりとした風が竹林の中をよぎる。深い井戸であった。釣瓶の
縄を、一手、一手確かめるように力を込めてたぐった。
なみなみと汲み上げた桶の水をバケツに返す。溢れた水は足元を
濡らし心地よかった。
井戸の守り木の如く、数百年は立つ檜の木があった。周りは深い雑
木林と竹林におおわれて、冷たい風が、坂下から吹きあげてきた。
毎日、五右衛門風呂に水を満杯にして、湯を沸かすのが私の役目
であった。
天秤棒の両端の鉤にバケツを提げ肩に担いで、井戸と風呂場を四
五回往復した。
その重さは私の肩に食い込んだ。
井戸の下側に住む友達陽子ちゃんが、道のない竹林の中を息を
弾ませながら駆け上がってきた。
「戦争に負けたよ！悔しか！はがいか！」
泣きはらした陽子ちゃんの、ほほには大粒の涙が。拳を握り締めて
宙に振り上げた。
その姿を見つめ、不思議に何故か、私は涙が湧かなかった。
戦争終結の思いは複雑であった。
「戦争は済んだのだ。」
複雑な気持ち、残念な思いはしたが、ほっとした安堵感も強かつ
た。
遠い明日に何か明るい光を見たような期待感の方が強かった。
時折竹林は風を呼び、陽子ちゃんの涙で濡れた頬を乾かしていた。
二、三歳の幼い少女の終戦の日の回想である。
(西区 稲原美津子さん)

天壤・無窮の合言葉

班長殿、敵です。確かに敵です。監視兵がソ連軍進入の第一報を
伝えた。
ここは、中国吉林省琿春西方約二十キロの地点、昭和十九年頃
より陣地構築を始め、ここが自分の死に場所になるかも知れない
と思いつながら、作業を進めた所、昭和二十年八月十五日午前七時
頃、折柄深い濃霧のため、視界全くゼロ、このとき異変が起こりつ
つあった。
天佑か神助か、俄かに天候が急変し、雲散霧消、太陽の光が燦
爛と眩しい姿を現してきた。そのとき忽然と目の前に現れたの
は、マンドリン銃(自動小銃)で武装した、ソ連兵の姿であった。
一瞬鼓動が停止した。その数およそ三百人。彼等は気が付く様
子もなく、話しながら歩いていく、息を止めて事態の推移を見守っ
た。
先頭が山の頂点を越えた頃を見計らって、第三機関銃中隊が、
正面と側面から、一斉射撃を行った。ソ連兵がバタバタと将棋倒し
にたおれた。呻き声や泣き声が、草むらの間を通して、手に取るよ
うに聞こえてくる。
一瞬にして戦場は修羅場と化した。殷々たる砲声は山野に響
き、戦闘機は飛来し、容赦なく機銃掃射で陣地を攻撃した。「蝟
壺」で応戦していた兵士に、多数の戦死者が出た。
こうした最中に、「日本軍将兵に告ぐ」という、ポツダム宣言受
諾のビラが、上空からヒラヒラと舞い降りてきた。
戦いは終日繰り返され、夕闇が深まるにつれて、銃声は次第に
消えていった。此の頃、作戦は全員斬り込み、夜十二時を期して、
最後の突撃命令が下されていた。合言葉は天壤・無窮、ついに来
るものが来たことを直感し、静かに故郷を眺めて、合掌し肉親に
別れを告げた。
ところが情勢は急変し、午後十一時三十分、終戦の報に接し、全
員斬り込みは中止となった。嗚呼なんとという奇跡なことである
う。死の直前三分の差で、九死に一生を得るとは、この瞬間か
ら、私の人生観は、大きく変貌した。
(西区 河野隆さん)

私の空襲体験

昭和二十年七月一日は熊本大空襲の日。私が国民学校初等
科三年生の時だ。
この日も爆撃機B29の来襲で空襲警報が発令され、私たち
家族は防空壕へ避難していたが、いつもと違い町内にも焼夷弾
が落ち、あちらこちらで火の手があがった。
「このままいたら焼け死ぬぞ。全員防空壕から出て逃げろ。」
という隣保組長さんのふれ回る大声に、防空壕から出て隣保
組長さんの後について人家のない方へと逃げた。父は夜勤で母
の両手に兄妹五人はしっかりと握り、広い原っぱに逃げたと記
憶している。
当時、私たちはJR水前寺駅近くに任んでいた。母から聞い
たところによると、逃げた方角は、保田窪、帯山方面で今の住
宅街も一面がから芋畑だったそうである。
逃げる途中、何回かB29が私たちの頭上を旋回し、焼夷弾の
破片がバラバラと落ちた。その都度、妹たちは怖さのあまり母
にしがみつく。母は肩を寄せ合い、その場に蹲っている私たちの
上に覆い被り守ってくれた。まさに、生と死の境を彷徨ったので
ある。
どのくらい時間が経ったのだろう。敵機が去り、東の空が白
みかけ家路へと急いだ。水前寺駅一帯は、一面が焼け野原。兵隊
さんが焼死体を一箇所に集め葬っていた。荷物のように積上げ
られた死体の山。地獄を見る光景であった。
母の法事のようにこうい話をしても、就学前だった妹たち
は、あまり記憶がないと言う。意外であった。
私のこの小さな空襲体験、家族で私しか記憶していない、し
かも年々薄れていく中、その恐ろしさ、悲惨さを妹、子ともたち
へ文字として残しておきたい。
(北区 松本弘之さん)

体験手記提供者一覧

| | |
|----------|-------|
| 松村 甲右さん | (中央区) |
| 安武 次郎太さん | (中央区) |
| 村田 尚信さん | (南区) |
| 吉永 ツヤ子さん | (東区) |
| 藤永 富子さん | (東区) |
| 中岡 靖子さん | (中央区) |
| 中島 昭夫さん | (東区) |
| 田尻 五助さん | (中央区) |
| 渡辺 和江さん | (中央区) |

掲載者を除く。※順不同

※手記はなるべく原文に近い状態で掲載しています。(広報課 ☎096-328-2043)

「戦後70年——つなげよう平和のバトン」

戦後70年平和啓発事業